

養護教諭養成大学における養護実習の現状と課題

～実習校と養成大学の連携の在り方の検討～

新開奏恵*1

(*1 宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科)

Current Status and Problems of Yogo Teaching Practice in Yogo Teacher Training University ～Examining the Nature of Cooperation between Training Schools and Training University～

Kanae Shinkai*1

(*1 Department of Nursing, Ube Frontier University)

養護実習を学生にとって充実したものとするためには、実習校と養成機関の連携が必要である。養成大学においては、実習校との連携を強化し、実習の目的や内容、評価を共通認識するための工夫が求められる。また、指導者と学生の良い関係が養護教諭の職務理解及び実習の満足度を高めることが明らかとなっていることから、学生と指導養護教諭が良好な関係を築く支援も重要である。

本研究では、実習の質を担保し、学生にとって養護実習を充実したものにするためには、養成大学が目指す実習の目的や内容、評価に加えて学生個人の学修状況を担当養護教諭と共通認識することが必要であると考えた。実習前の送付資料や担当養護教諭との事前打ち合わせ、学校訪問の時期などの改善を行い、実習後に効果的な連携の在り方について評価を行った。現在、本学で行っている実習校との連携は、養護実習における目的や内容の共有、学生理解において効果的であった。

キーワード：養護教諭養成，養護実習，連携

Keyword : Yogo teacher training practical, training for student Yogo teachers, Cooperation

1. はじめに

養護教諭免許を取得するためには、教育職員免許法第5条の規定により、養護実習および養護実習指導を履修し単位を修得しなければならない。養護実習は教育実習であり、教育者として必要な資質の基盤を培うことが主要なねらいである。教育実習は、学内で学んだ知識・技能や理論を実際の教育現場で適用・応用させ、体験を通して学びを統合させていく学習方法であり、児童・生徒を理解する上でまたとない機会である。先輩教師の活動に接したり、実際に児童・生徒と関わり、教育活動に取り組んだりする中で、自分なり子ども観や教育観、目指す養護教諭像を確かにする契機となる。

養護実習を学生にとって充実したものとするためには、実習校と養成機関の連携が必要である。先行研究¹⁾⁴⁾では、養護実習の課題点として、担当養護教諭は現場で役に立つ実務に関する内容を重視していることに対して、大学は養護実践を展開できるプロセスや基盤となる理論を重視している等の違いがあり、今後は実習校との連携を強化し、実習の目的、内容、評価を共通認識できる指導の工夫が求められている。そのため、養成機関は養護教諭の意見を取り入れながら、具体的な実習内容や指導方法、評価方法等について連携体制を構築していく必要がある。

また、養護実習担当者の多くは自分の指導力や指導方法に悩みや困難をもっており、養護実習が学生、大

〔看護学〕

〔資料〕

学、学校の三者にとってより有益なものとなるためには、養護教諭の資質能力の向上が課題でもある。さらに、指導者と学生の良好な関係が、養護教諭の職務理解及び実習の満足度を高めることが明らかとなっていることから、大学担当者は学生と指導養護教諭が良好な関係を築く支援も重要である。

本学においては、養護実習にあたり実習の目的や内容、評価について「実習ガイドブック」を作成し、指導養護教諭に示している。また、宇部市との包括的連携協定に基づき県外出身学生の実習を宇部市管内の小・中学校で実施している。このことにより、大学担当者が実習校を訪問し担当者と実習の進め方について直接話し合う機会をもつことができる。訪問の際、担当養護教諭から、実習での指導内容に加え、学生個人の課題（意欲や理解度）に対する指導の在り方についての悩みや困難さを相談されることが多くあった。

そこで、本研究では実習の質を担保し、学生にとって養護実習を充実したものにするためには、養成大学が目指す実習の目的、内容、評価に加えて学生個人の学修状況を担当養護教諭と共通認識することが必要であると考えた。実習前の送付資料や担当養護教諭との事前学習、学校訪問の期日の改善を行い、実習後に連携の在り方について評価することとした。

2. 実習校と養成大学の連携における改善点

2.1. 養護実習指導のための資料

例年送付している「養護実習ガイドブック」に以下の資料を加えて送付した。

- ・学内講義での学生の学びの記録

表1は「養護概論」での学びの記録である。

- ・実習内容理解度

表2は養護実習ガイドブックに記載している実習内容に対する学生の全体評価と学生の自己評価である。

- ・養成課程のカリキュラム

前年度の「養護実習での学び」の報告冊子や実習後の教職実践演習についてのカリキュラム内容を示した。

2.2. 事前学習会・意見交換会

3年次前期「養護実習指導」の講義の際に、実習担当養護教諭2名を講師として招聘した。学校における児童生徒の発達に即した指導や支援について現職の養

護教諭の実践例から学ぶことを目的とした。養護教諭の職務についての講話後、学生との意見交換を行った。

2.3. 実習校訪問の期日

実習校訪問は、例年実習期間の後半に1回実施していたが、実習前半と後半に2回実施することに変更した。1回目の訪問では、指導養護教諭と実習生の関係構築のための助言を行うことを目的とした。2回目の訪問では3週目に実施する保健教育の助言やサポートを行うことを目的とした。

3. 養成大学と実習校の連携内容の評価

3.1. 方法

2019年8月27日～9月21日に養護実習を担当した学校の養護教諭13名を対象に質問紙調査を行った（回収率92.3%、有効回答率100%）。質問内容は、①担当養護教諭の属性（校種・経験年数・担当回数・参考資料・悩みや困難感）、②養成大学との連携評価（「養護実習ガイドブック」「実習生学びの記録」「大学担当者による学校訪問」による「目的理解」「指導内容理解」「評価の理解」「学生の指導上の留意点の理解」の評価）、③養護実習評価の観点、④担当者の学びである。回答は②④については、「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」「少しあてはまる」「あてはまらない」、③については「とてもそう思う」「まあまあ思う」「少し思う」「思わない」の選択肢で回答を求めた。悩みや困難感、養護実習における養成大学との連携に関する意見や要望、養護実習評価項目については自由記述も加えた。自由記述の分析にあたっては、記述内容をなるべく活かす形でコード化し、同様の文脈ごとにカテゴリーとして分類した。文中ではカテゴリーを【 】で示した。調査にあたっては、実習校の校長・養護教諭に研究の趣旨を説明し、同意を得たうえで行った。

3.2. 結果

3.2.1 担当養護教諭の属性

対象者は回答が返信された12名、属性は表3-1の通り91.7%が小学校に勤務している。経験年数は表3-2の通りで、最少は4年、最大は38年で、平均経験年数は18.9年である。経験年数が10年以上は74%である。これまでの実習担当回数は表3-3の通り、最少は0回、最大は5回で、平均回数は2.6回である。

表1 「養護概論」での学び 養護教諭の役割として大切だと思うこと

項目	大切だと思った理由	養護教諭の役割として具体的な内容	
保健室 経営	<ul style="list-style-type: none"> ・どの様にしたら教室へ戻れるか考えた自分の支援と違っていたこと ・ロールプレーで生徒役をしてみても生徒の気持ちが分かった ・生徒はケガをしていなくても心が落ち着ける場所にいたいと思うから保健室へやって来る 	子どもに見合った支援になるためのアセスメント	子どもの気持ちになって考えること
		温かく迎え入れること	目標に向けた支援計画立案
		生徒がこの先生なら話せると思ってくれる養護教諭	大人になっても残る健康に過ごすための予防方法
健康診断	<ul style="list-style-type: none"> ・健康診断を通して様々な疑問をもたせて一緒に解決していくこと 	自分の身体への関心を深めるう歯や視力低下など	自らコントロールできるようにする 将来の健康が変わる
熱中症	<ul style="list-style-type: none"> ・水分補給だけでは熱中症は防げない ・学校には熱中症になる危険性があるから ・学校での熱中症の発生が多いためしっかりとした対策が必要 	環境を整える 温湿度計の設置 湿度の把握も大切 記録	環境や行事等から熱中症の発生や予防を考える 環境管理
		知識を学びあい異常な状態や対処法を学ぶ	ほげんだよりによる発信
		連携 学校全体で対応できるようにする	教員・医療機関・保護者との連携
		部活動の時間帯や体調不良を顧問に訴えられること	発生時に対応できるように事前に準備しておく
感染症	<ul style="list-style-type: none"> ・対象に合わせた情報を発信すること ・教師は指導するだけと思っていて子どもたちに考えてもらうためには工夫が必要 	教師に感染症の発生状況を知らせる 感染拡大を防ぐ	児童生徒に予防方法を知らせる
		子どもたちの様子や言葉に耳を傾けてかわかること	保護者に感染症の状況や学校の対応を知らせ不安の軽減をはかる
		子どもが主体的に考え参加できる指導や環境づくり 子どもと一緒に考える 子どもの発達にあわせる	養護教諭は学校全体をみていくことや地域医療機関や保護者との連携が大切
保健教育	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の指導は、説明ばかりで一方的な指導だった ・授業を通して、学生への指導時と小学4年生対象の模擬授業としての指導時の内容や話し方の違いに驚いた ・教師はそのつもりがなくても指導の場面で子どもを傷つけていることがある 	相手の状況や気持ちを考える 自分が相手の状況になって考える 保健指導の際の言葉や絵	人の前に立つこと 寝ている学生を先生がどんな気持ちで見ているか
		子どもの反応をみること 子どもの考える時間の確保	「そうだったのか」と思える 問いかけ
		これからの行動に生かしていくための自発性につなげる	一人ひとりの考えや感じ方は違うので、それらを引き出す
		対象に合わせた内容や話し方 個人で発表・グループワークの入れ方	子どもの「なぜ?」「どうして?」という気持ちを先読みした授業や分からないことが解決できること
自己研鑽	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な職務を行っていくには、一人ではできないことはなく、何かを立案するには自らが積極的に働きかけなければならない 	自分自身の学んだ知識を自分自身の内に秘めず具体的な内容を伝え、発信する	自分自身が探求心や好奇心をもって様々な視点を取り入れていく

[看護学]
[資料]

表2 学内講義後の学生全体評価・学生自己評価

学内講義による養護実習内容の理解度

31. 1. 23

理解度 ○学習・理解した 2点 △ 少し学習・理解した 1点 × 分からない 0点

養護実習 具体的目標	実習内容	点数計	平均	×人数	学生個人評価
①保健室経営と管理、養護教諭の日常の執務について学ぶ	・保健室の経営方法	22	1.4	4	学生個人の評価を記載し、実習校へ送付する
	・諸帳簿の種類と記録・保管	15	0.9	6	
	・器具・薬品・衛生材料の整備	15	0.9	6	
	・執務計画の具体例	10	0.6	8	
	・運営方法	19	1.2	4	
	・評価方法	17	1.1	5	
②健康観察の意義と欠席状況の把握 仕方を学び、担任が行う健康観察の援助をする	・健康観察の場面と実施方法	29	1.8	0	
	・担任への連絡・助言	27	1.7	0	
	・保護者への連絡	20	1.3	3	
	・事後処理と確認	16	1.0	5	
③養護教諭が行う健康相談活動を理解する	・健康相談活動の流れと方法	28	1.8	0	
	・来室者の対応への参観	25	1.6	2	
	・来室事例の評価と記録	21	1.3	2	
④保健室での救急処置や児童生徒に対する適切な指導や助言の仕方を学ぶ	・学校での救急時の対応	22	1.4	2	
	・救急処置の実際	23	1.4	2	
	・児童生徒への対応	24	1.5	3	
	・簡単な救急処置の実施	25	1.6	3	
	・処置に必要な薬品の管理	15	0.9	5	
	・事後処理、記録方法	15	0.9	5	
⑤特別支援教育について理解し、児童-生徒の多様なニーズに対する支援について学ぶ	・健康上の問題を持つ児童生徒に対する継続的な管理や指導の実際	28	1.8	0	
	・支援の必要な児童生徒の支援の実際	25	1.6	0	
⑥定期健康診断の準備や実施、事前事後処理の仕方を学ぶ	・実施計画の立案手順	25	1.6	1	
	・事前準備の内容と仕方	28	1.8	0	
	・実施方法	28	1.8	0	
	・事後措置の方法	22	1.4	1	
	・健康診断票の作成・保管	19	1.2	4	
	・結果のまとめ方	21	1.3	1	
	・保健統計の活用	8	0.5	9	
⑦学校感染症・食中毒発生時の対応と予防の仕方を学ぶ	・予防対策	31	1.9	0	
	・発生時の処置	27	1.7	1	
	・予防接種の調査確認	26	1.6	1	
	・保健指導	30	1.9	0	
⑧学校環境衛生について学ぶ	・学校安全衛生活動の仕方	27	1.7	0	
	・環境衛生検査の方法	26	1.6	0	
	・結果の生かし方、事後措置など	17	1.1	4	
⑨保健教育の実際を体験し、保健教育活動の位置づけを理解する	・保健学習、保健指導、総合的な学習の時間の特徴と違い	27	1.7	0	
	・保健学習および教科の授業の参観	27	1.7	1	
	・保健指導又は保健学習の実施	28	1.8	0	
⑩学校行事、体験学習などにおける保健室の役割を学ぶ	・行事や野外活動時の対応	19	1.2	4	
⑪学校医、学校歯科医、学校薬剤師、その他関係機関との連携について学ぶ	・家庭や地域の関係機関との連携の方法など	25	1.6	1	

表 3-1 校種

校種	n	%
小学校	11	91.7
中学校	1	8.3

表 3-2 経験年数

経験年数	n	%
5年未満	1	8.3
6-9年	1	8.3
10-19年	5	41.7
20-29年	3	25.0
30年以上	2	16.7

表 3-3 担当回数

担当回数	n	%
0回	1	8.3
1回	3	25.0
2回	2	16.7
3回	2	16.7
4回	2	16.7
5回	2	16.7

3.2.2 実習指導時に参考にしたもの

実習指導時に参考にしたものがあると回答したものは100%であり、内容は表4の通り、「養護実習ガイドブック(本学作成)」が58.3%、「養護教諭の職務ハンドブック(山口県養護教諭会作成)」が41.7%だった。

3.2.3 実習を担当する際の悩みや困難感

「自分の指導力」「指導時間の確保」「実習の内容」「指導の方法」「実習の評価」「学生の資質や能力」「受け入れ体制」「養成大学との連携」について悩みや困難感が「ある」「なし」で回答を求めた結果は表5-1の通りである。「養成大学との連携」の悩みや困難感が「ない」は、91.6%である。悩みや困難感が「ある」は、「自分の指導力」91.6%、「実習の内容」66.7%、「指導の方法」66.7%で養護教諭自身の問題において比率が高くなっている。自由記述では、表5-2の通り【自分自身の力量・指導力】【受け入れ体制】【時間の確保】【学生の資質能力】の4つのカテゴリーが抽出された。

表 4 参考にした資料・書籍等

参考資料	複数回答	n	%
養護実習ガイドブック		7	58.3
養護教諭の職務ハンドブック		5	41.7
県教育委員会実習手引き		3	25.0
他校の養護実習手引き		3	25.0
自校の教育実習手引き		0	0
その他		5	41.7

表 5-1 養護教諭の悩みや困難感

悩みや困難感	ある n	%	ない n	%
自分の指導力	11	91.6	1	8.4
指導方法	8	66.7	4	33.3
実習内容	8	66.7	4	33.3
学生の資質能力	7	58.3	5	41.7
指導時間確保	7	58.3	5	41.7
実施の評価	5	41.7	7	58.3
受け入れ体制	4	33.3	8	66.7
養成大学との連携	1	8.4	11	91.6

表 5-2 養護教諭の悩みや困難感

自分自身の力量・指導力	自分自身の力量も不安であり、この程度の実習で良いのか、学生のためになっているのか実習生が来るたびに悩む 自分の指導で良かったのか不安 受け入れる養護教諭の力量により学生に不利益を与えてはならないので不安がつきまとう 自分の指導力 必要なことをきちんと指導できているか
受け入れ体制	実習計画の立案も大変悩んだ。標準的な例を示していただけるとありがたい 受け入れ体制が確立しておらず、校内の教員に相談しにくい点があった 自分一人での指導になるため(他の教諭の協力体制があっても)負担感が大きい 養護実習は全て養護教諭任せである
時間の確保	保健指導や保健学習も時間を確保するのに結構気を遣う 実習生に対する指導時間を確保するという事は、自分の仕事が後まわしになる 保健室の業務が忙しく十分に指導時間がとれない
学生の資質能力	学生が大学でどの程度学習しているのかわからない 学生の能力はやはり低くなっているように感じる どの程度のものをさせるか悩む あまり手や口を出しすぎても実習にならないと分かっ ていても出さざるを得ない場合もある

表 6-1 実習ガイドブックによる効果

実習ガイドブック	とても あてはまる 4点		まあまあ あてはまる 3点		少し あてはまる 2点		あてはま らない 1点		平均 点
	n	%	n	%	n	%	n	%	
	養護実習の目的理解	5	41.7	7	58.3	0	0	0	
養護実習の指導内容理解	5	41.7	7	58.3	0	0	0	0	3.4
養護実習の評価理解	3	25.0	9	75.0	0	0	0	0	3.3
学生に対する指導上の留意点理解	4	33.3	7	58.3	1	8.3	0	0	3.3

表 6-2 学内講義での学びの記録による効果

学びの記録	とても あてはまる 4点		まあまあ あてはまる 3点		少し あてはまる 2点		あてはま らない 1点		平均 点
	n	%	n	%	n	%	n	%	
	養護実習の目的理解	5	41.7	7	58.3	0	0	0	
養護実習の指導内容理解	5	41.7	7	58.3	0	0	0	0	3.4
養護実習の評価理解	4	33.3	8	66.7	0	0	0	0	3.3
学生に対する指導上の留意点理解	5	41.7	6	50.0	1	8.3	0	0	3.3

表 6-3 大学担当者訪問による効果

大学担当者訪問	とても あてはまる 4点		まあまあ あてはまる 3点		少し あてはまる 2点		あてはま らない 1点		平均 点
	n	%	n	%	n	%	n	%	
	養護実習の目的理解	8	66.7	4	33.3	0	0	0	
養護実習の指導内容理解	6	50.0	6	50.0	0	0	0	0	3.5
養護実習の評価理解	4	33.3	7	58.3	1	8.3	0	0	3.3
学生に対する指導上の留意点理解	6	50.0	5	41.7	1	8.3	0	0	3.4

表 6-4 事前打ち合わせ会について

事前打ち合わせ会	とても あてはまる 4点		まあまあ あてはまる 3点		少し あてはまる 2点		あてはま らない 1点		平均 点
	n	%	n	%	n	%	n	%	
	事前打ち合わせに参加したい	3	25.0	0	0	2	16.7	7	

[看護学]

[資料]

表 6-5 養成大学との連携に関する意見や要望

直接の会話による安心感	大学担当の先生が学校を訪問され話を直接できることでこちらの不安が軽減した 他校の養護教諭が三週間の中でどのような指導を計画しているのかが分からないため事前打ち合わせが開催されれば参加し、実習について情報交換をしたい 前もって会えていたので、何かあったら大学に連絡すれば良いと思っていた 顔の見える連携はいいなと思った 直接会って実習生の話もできたのが大変有難かった
学生との関係づくり	事前打ち合わせ会に参加し、自分の担当する学生以外の学生（仲間）を見て、担当学生の様子や意欲も感じることができた 出会ってどんな学生か分かるのに1週間かかるので、事前に会うことでお互い安心して9月を迎えることができた
資料による理解	ガイドブックで十分理解できますので、事前打ち合わせは必要ないかと思う 事前に実習報告の一部や学生の自己評価を資料としていただいていたので参考にすることができた

表 7-1 評価項目に関する適切さ

評価項目	とても思う		まあまあ思う		少し思う		思わない		平均点
	4点		3点		2点		1点		
	n	%	n	%	n	%	n	%	
①無断欠勤や遅刻をせず、挨拶・服装・言葉遣いなど社会人としての基本が身についていた	9	75.0	3	25.0	0	0	0	0	3.5
②指導教員からの指導を改善につなげ、何事にも積極的に挑戦しようとする姿勢が見られた	7	58.3	4	33.3	1	8.3	0	0	3.5
③教職への熱意・関心をもち、実習へ主体的に取り組んだ	8	66.7	3	25.0	1	8.3	0	0	3.6
④学校教育活動全般や養護教諭の役割について理解し、積極的に活動した	6	50.0	5	41.7	1	8.3	0	0	3.4
⑤保健室経営について理解し、健康課題の把握方法や課題解決のための実践について積極的に学んだ	4	33.3	7	58.3	1	8.3	0	0	3.3
⑥救急体制を理解し、来室者の対応や簡単な救急処置の実践ができた	7	58.3	4	33.3	1	8.3	0	0	3.5
⑦健康観察・環境衛生・健康相談など保健管理に積極的に活動した	5	41.7	7	58.3	0	0	0	0	3.4
⑧児童生徒保健委員会活動の目的を理解し、活動時の支援ができた	5	41.7	6	50.0	0	0	1	8.3	3.3
⑨保健指導や保健学習において、児童・生徒に適した授業展開や資料作成に創意工夫がみられた	7	58.3	4	33.3	1	8.3	0	0	3.5
⑩児童・生徒と積極的にかかわりをもとめようとするなど、児童・生徒理解に努めた	10	83.3	2	16.7	0	0	0	0	3.8
⑪丁寧に要点が整理され、課題を明確に捉えた記録ができた	6	50.0	4	33.3	2	16.7	0	0	3.3

〔看護学〕
〔資料〕

表 7-2 評価項目に関する適切さ

評価項目の活動の実施の有無	運動会前ということもあり委員会活動が活発に行われたい状況であったため、委員会活動の支援は行えなかった学校行事の時期により評価できない場合もある
評価基準が不明確	積極的に活動したや積極的に学んだの評価が難しかった
配点の違い	評価の観点によっては、Aが5点のところと4点のところがあり、5点のところは少し評価しづらかった

表 8 担当者の気づき

担当者の気づき	とてもあてはまる 4点		まあまああてはまる 3点		少しあてはまる 2点		あてはまらない 1点		平均 点
	n	%	n	%	n	%	n	%	
	自分自身の実践の振り返りにつながった	7	58.3	5	41.7	0	0	0	
自分自身の資質の向上につながった	5	41.7	6	50.0	1	8.3	0	0	3.3
他の教員の学校保健(養護教諭の職務)に関する関心が高まった	2	16.7	4	33.3	6	50.0	0	0	2.7
学生から学ぶことがあった	4	33.3	4	33.3	4	33.3	0	0	3.0

3.2.4 養成大学との連携

養成大学との連携の方法の「養護実習ガイドブック」「学内講義での学びの記録」「大学担当者による学校訪問」と連携の内容「目的理解」「指導内容理解」「評価の理解」「学生の指導上の留意点の理解」の関係については表 6-1, 6-2, 6-3 の通りであった。「事前打ち合わせ会」への参加については表 6-4 の通りであった。「とてもあてはまる」4点「まあまああてはまる」3点「少しあてはまる」2点「あてはまらない」1点とし平均点を求めた。「目的理解」「指導内容理解」において「とてもあてはまる・まあまああてはまる」との回答は100%である。「目的理解」「学生に対する指導上の留意点理解」については「大学担当者による学校訪問」が「とてもあてはまる」と回答した者は50%である。一方で「事前打ち合わせ会」については、7名(50%)が参加を希望しなかった。自由記述では表 6-5 の通り連携の効果として【直接の会話による安心感】【学生との関係づくり】【資料による理解】があげられた。

3.2.5 実習の評価項目

評価項目が適切かについては表 7-1 の通りである。「とても思う」4点「まあまあ思う」3点「少し思う」2点「思わない」1点とし平均点を求めた。「無断欠勤や遅刻をせず、挨拶・服装・言葉遣いなど社会人としての基本が身についていた」「児童・生徒と積極的にか

かわりをもとうとするなど、児童・生徒理解に努めた」等、態度や行動については評価しやすい。一方、「保健室経営について理解し、健康課題の把握方法や課題解決のための実践について積極的に学んだ」は、学びの状況については評価しづらいことが分かった。自由記述では、表 7-2 の通り不適切な内容として【評価項目の活動の実施の有無】【評価基準が不明確】【配点の違い】があげられた。

3.2.6 担当者の気づき

担当者自身の気づきは表 8 の通りである。「とてもあてはまる」4点「まあまああてはまる」3点「少しあてはまる」2点「あてはまらない」1点とし平均点を求めた。「自分自身の実践の振り返り」「自分自身の資質の向上」は、ほとんどの担当者が「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」と答えていた。しかし、「他の教員の関心」は「少しあてはまる」が50%と少なかった。

4. 考察

養護実習担当養護教諭は、大学作成の「養護実習ガイドブック」を活用しており、実習の目的理解や指導内容の理解につながっていた。また、山口県養護教諭会作成の「養護教諭の職務ハンドブック」⁹⁾を活用している担当者が多いことから、大学の実習前指導におい

〔看護学〕

〔資料〕

て令和3年度に改定された「養護教諭の職務ハンドブック」⁶⁾を活用することで、学生への指導内容を統一することができる。

また、「養護教諭の職務ハンドブック」は、山口県教員育成指標をもとに、卒業時に身につけておく資質・能力が示されており、学生が実習の目的を明確にすることができる。また、養護教諭の職務における実践方法も記載されていることから、養護概論や健康相談活動など、学内講義において活用することにより、学生の実習における積極的な活動参加につながると考える。

横浜市教育委員会は「教育実習サポートガイド」養護教諭編⁷⁾を作成し、柔軟な運用のアイデアや事例を提示している。今後、本学においても山口県教育委員会や山口県養護教諭会と連携し、より具体的なガイドブックを作成することにより、実習計画立案や実習指導内容に対する養護教諭の負担の軽減を図ることが期待される。

連携における改善による効果としては、「目的理解」「指導内容理解」「評価の理解」「学生の指導上の留意点の理解」において、効果的な連携に繋がっていると言える。担当養護教諭が学生を理解するにあたり、学内での講義の学びの記録や実習内容の自己評価の資料は有効であった。なかでも、大学担当者の実習校訪問による情報交換が有効であるため、大学担当者の積極的なサポートを継続する。

本学では、実習1ヶ月前に学生が学校訪問を行い、管理職、教務主任、養護教諭と実習計画の打ち合わせを行っている。「事前訪問をするまでは不安だったが、計画を提示いただき安心した」と話す学生が多い。県外出身学生の実習を宇部市管内の小・中学校で実施していることの効果でもある。

学内での事前打ち合わせ会に参加した養護教諭からは、事前に学生との関係が作られるため、実習をスムーズに始めることができたという気づきをいただいた。養護実習を円滑に進める上で、実習前に学生と担当養護教諭の関係づくりを行う機会を設けることにより、双方の不安の軽減につながると考える。事前打ち合わせ会については「養護実習ガイドブック」等の書面で理解できるため必要ないとの回答もあった。これは、養護教諭の多忙さも起因していることが推察されるため、ICTを活用した遠隔での情報共有も検討していく。

一方で、養護実習における悩みや困難感として自分の力量不足との回答が多いことから、打ち合わせ会に

あわせて、養護教諭の資質向上に向けた研修会を企画するなどの工夫が求められる。実習校担当養護教諭と養成大学担当者との連絡会議や実習前指導での学生との意見交換会を実施することで効果的な連携が推進され、実習の質の向上にも繋がると考える。

本学では、平成27年度から「養護教諭フロンティア実践研究会」(山口県内養護教諭の研修会や事例検討会)を学内で開催している。友定⁸⁾は、「養護教諭フロンティア実践研究会」設置にあたり、「学びには理論と実践の往還が必要である。自分が体験することは限られており、他者の体験を聞き学ぶことで理解と実践力を鍛えることができる。また、学校では一人配置の多い養護教諭は研究会等で仲間に学ぶことが重要である。」と述べている。学生は「養護教諭フロンティア実践研究会」を通して、学校現場の臨場感を持った学びの場での出会いと経験は、養護教諭としての使命や責任を直に感じることができる。このような学びの場を提供していく事により、養護実習担当者の悩みや困難感の軽減を図ることが期待される。

評価について、態度や行動については評価しやすいが、学びの状況については評価しづらいことが分かった。実習期間中に活動が計画されず評価できない項目もあることから、検討・改善が必要である。

担当養護教諭は、他の教員の関心が少ないことや受け入れ体制に困難さを感じていることから、管理職をはじめとする他の教員への協力依頼も積極的に行っていく必要がある。実習後に「養護実習の学び」を作成し実習校に送るなど、学校全体への働きかけを進めていく。

養護実習は指導者と学生の良好な関係が、養護教諭の職務理解及び、実習の満足度を高めることが明らかとなっていることから、学生の実習に対する満足度の評価も必要である。今後、更に養護実習が担当養護教諭と学生が相互に学び合う関係を構築していくための養成大学の役割を検討していくことにより、養護実習の質の保証にも寄与すると思われる。

5. 結論

本研究の目的は、養護実習を学生にとって充実したものとするため実習校と養成大学の連携の在り方を評価することであった。現在本学で行っている「養護実習ガイドブック」及び実習内容に対する理解度・学内講義での学びの記録・学生の自己評価・養成課程の力

[看護学]

[資料]

リキュラム説明文などの送付や大学担当者の訪問による実習校との連携は、目的や内容の共有、学生理解において効果的であった。

6. 謝辞

本研究にあたりアンケート調査にご協力頂いた実習校の養護教諭の皆様に感謝申し上げます。また、本学教育にあたりご協力いただいております、宇部市教育委員会山口県内の小学校・中学校・高等学校の教職員の皆様に感謝申し上げます。

7. 引用文献

- 1) 高田恵美子, 治部哲也: 養護教諭の経験年数からみた養護実習の現状と課題, 関西女子短期大学紀要, 26, pp1-16, 2017.
- 2) 齋藤千景, 竹鼻ゆかり, 朝倉隆司 ほか: 養護教諭養成大学における養護実習の現状と課題, 学校保健研究, 58, pp75-83, 2016.
- 3) 竹鼻ゆかり, 朝倉隆司, 渡邊正樹 ほか: 養護実習

における学生と養護教諭の学びの検討, 東京学芸大学紀要 62, pp55-61, 2010.

4) 八重樫節子, 小貫麻美: 養護実習における養護実習学生の学びの実態 - 養護実習事後指導における質問紙調査から -, 東京福祉大学大学院紀要, 第 2 巻, pp183-189, 2010.

5) 山口県養護教諭会: 養護教諭の職務 ハンドブック 2010, 2010.11.

6) 山口県養護教諭会: 養護教諭の職務 ハンドブック 2020, 2021.2.

7) 横浜市教育委員会: 教育実習サポートガイド, 養護教諭編, 2018.4.

8) 齋藤千景, 竹鼻ゆかり, 三森寧子 ほか: 養護実習を行う養護教諭のための「養護実習サポートガイド」の作成と評価, 埼玉大学紀要, 69 (1), pp68-75, 2020.1.1.

9) 友定保博, 佐伯里英子: 本学の看護学科における養護教諭養成教育の現状と課題, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, Vol.8, No.1, pp29-37, 2016.